

# 「農業クラブ員が現在抱えている農業に関する課題を意識し、その解決のために各都道府県連盟やブロック連盟が協力してできることにはどんなことがあるか。」

クラブ員代表者会議 東海ブロック連盟 三重県立明野高等学校  
生産科学科 3年 勢力 汀菜  
生産科学科 3年 齋藤 大雅

農業クラブ員が現在抱えている農業に関する課題の一つが、農業関連の就職が少ないことです。結果として就農者も少ないのが現状となっています。そして農業従事者の高齢化が進んでいる中、担い手不足は全国的に大きな問題となっています。

昨年度、明野高校卒業生の中で農業関連の就職者は、農業協同組合を除くと1名であり、本校就職者全体の1%弱となっています。ちなみに、その企業は「株式会社あぐりん伊勢」で、伊勢農業協同組合の出資で平成24年に設立されました。こちらでは伊勢ネギの生産をおこなっており、特色として、新規就農を目指す職員は、2年間の勤務で栽培技術などを習得し就農をします。このような新しい就農の仕組み、一定の現金収入の確保が、高校生の求人にとって必要であると考えられます。こちらの企業に関しては、我が校独自の科目である「キャリアプラン」で講演に来て頂いており、当時2年生であった生徒には一定の印象は残っていたと思います。ネギやネギせんべいのプレゼントもありました。



写真は平成28年に講演をして下さっている、代表取締役社長の前田政吉様です。「キャリアプラン」という授業は毎月1人または1団体の講師様をお招きし、農業高校2年生にとって就職・就業についてお話し頂いて、今後の進路決定の一助にしようという取組です。ちなみに「あぐりん伊勢」様は毎年来て頂いて、興味深いお話を聞かせて頂いています。

さて今年度も当校に高校生向けの求人票が送られてきています。その中には農業従事者を募集している企業の求人も一定数含まれています。しかしその他の企業も多く求人を出しているため、当校では農業系の就職に至っていないのが現状です。また、今年度は過去

最高の高校生求人倍率を示しているのも、より一層私たちは様々な業種から選ぶことが出来ています。結果として給与であったり、離職率の低さであったり、家から通いやすい立地から選びがちになります。つまり、それはやりがいと、労働量、労働内容、賃金のバランスがとれていないのも一つの原因であると思われます。例えば横並びに置かれた求人票の一方が工場勤務でもう一方が牧場勤務であった場合、給与が同じなら、一般の高校生にとって選択しやすいのは前者であろうと思われます。授業では農業のやりがい、生命を扱う責任感などを学んでいるのですが、現実にはもっとわかりやすい、比較しやすい数字に心を引かれてしまいます。

また、農業高校に進学する中学生自体が減少していることも問題になっています。明野高校では近年、募集定員割れを起こしており、来年度はクラス減少になってしまいました。もちろん近隣地域の中学生・小学生の実数自体が減少していることが主な原因ですが、それ以上に魅力ある学校作りを今後も行っていき、農業への認知度を上げていかなければなりません。

そこでは、農業のやりがい、楽しさをより多くの人々にわかってもらえる取り組みが必要になってきます。その役割の一翼を担うのが農業高校であります。各校では、地元小学校や幼稚園などとコラボし、様々な農業体験・食育活動を行っています。当校生産科学科では田植え、餅つき体験、花壇作りを行い、食品科学科では近隣幼稚園と、大豆作りから始めて、味噌の仕込みまで体験してもらっています。こういった地道な取組が、幼稚園児、小学生の心に残り、将来の進路決定時に好影響を与えてくれればと考えます。実際に入試の面接時に、そういった子供の時の体験がきっかけで、農業高校を志望したと答える受験生も少なからずいます。



そういった草の根的活動をよりいっそう、効率的、意欲的に行うのに農業クラブの活動が助けになると考えます。意見発表大会、プロジェクト発表大会、などでの情報共有、ライバル心も良い効果をもたらしています。このように県内の高校生とは様々な場面で、交流することが出来ますし、農業クラブ以外にも部活動の場や、先生方から他校のお話を聞くこともあります。

地域の産業とのコラボレーションをいろいろなメディアで、取り上げてもらう事もアピールには重要だと感じます。私たち明野高校では生産科学科、畜産専攻班で一昨年、当校で産出する豚肉をブランド登録する取り組みを行い、「伊勢あかりのぼーく」として登録に成功しました。品質管理や書類の手配など大変な事もありましたが、地元のレストランなどで使用されているのを見ると、とてもやりがいを感じました。さらに昨年は食品科学科の生産する味噌とコラボして肉味噌の商品化にも挑戦し、現在では売り切れるほどの人

気商品になっています。これらの取り組みは東海地区をネットワークしている中京テレビの5分番組で取り上げられ、また、地元伊勢新聞では一面の特集記事にもなりました。



また、食品科学科では昨年、自校敷地内にお茶畑と製茶室をもつ県内唯一の高校として、J G A P 認証の取得に挑戦しました。生徒達は様々な書類とにらめっこしながら一つ一つ課題をクリアしていきました。何度かの模擬審査を経て本番の審査に見事合格することが出来ました。この取り組みも地元三重テレビにニュース番組内で取り上げられ。また各新聞地元欄に何度か登場しました。こういったことも地域の住民に農業高校が普段からどのような事に取り組んでいるかを知らしめる良い機会になっていると考えます。そして普段から注意していれば、自分の学校だけで無く、他校の取り組みがテレビや新聞に掲載されていて刺激を受けることも多々あります。



全国的にはリーダーシップがその役割をしていると思います。毎号様々な農業高校の記事がキレイな写真と共に載っていて勉強になります。が、実際はその内容は地域性が強く、当校では、応用がしにくいものであったり、内容が難しかったりして、活用できていないのが現実です。リーダーシップのより有効な活用法のアイデアを聞いてみたいです。皆さんからのご意見をお願いします。